

資格の学校 **TAC** 平成 25 年度 東京都 I 類 B [行政/一般方式] 採用試験

専門記述 社会学 【解答例】

問題

バージェスの同心円地帯理論について、同心円地帯理論に対するホイトの主張や、ハリスとウルマンによる批判にも言及して説明せよ。

解答のポイント

平成 14 年の特別区 I 類ではほぼ同じテーマが出題されており、十分な準備の下に試験に臨むことのできた受験生も多かったであろう。都市構造論、なかでもバージェスの同心円地帯理論は都市社会学の分野では基本的な事項であり、社会学に自信がある受験生であれば必ず解きたい問題である。

まず同心円地帯理論については、①各地域の名称と順番（中心から、中心業務地区→遷移地帯（推移地帯）→労働者住宅（居住）地帯→中流階級居住地帯（住宅地帯）→通勤者地帯）は必須である。また、②それぞれの地域の特徴も触れておきたい。そして、③バージェスがシカゴ学派であることと、④シカゴを観察することで導き出した理論であることも書けることが望ましい。

なお、今回のメインテーマは同心円地帯理論であるため、その説明が記述の大半となる。ホイトについては「扇形モデル（セクター理論）」という名称と「同心円ではなく扇形」という差異、ハリスとウルマンについては「多核心モデル（理論）」という名称と「都市の核心は1つだけでなく複数」という差異が示してあれば十分だろう。

解答例

シカゴ学派のバージェスは、人間生態学の方法論に基づいて 20 世紀初頭のシカゴを観察して社会地図を作製することで、都市が地域的に拡大する過程に一定の法則性を見出した。都心部にあたる「中心業務地区」を核として、都心からの距離に応じてそれぞれ他と区別される特色ある地域が同心円状に分布する。

まず中心業務地区はビジネス街であり、官公庁やオフィスビルが建ち並ぶ。そのすぐ外側にある「遷移地帯」は、都市に流入してきた移民が最初に居住する地域であり、スラムと呼ばれる劣悪な生活環境が生じる。やがて移民二世は遷移地帯から脱出し、その外周に「労働者住宅地帯」を形成するようになる。ここは通勤に便利な低質住宅地である。さらに外側には良質な住宅地である「中流階級居住地帯」が形成される。ここは広い土地や豊かな緑がある環境良好な住宅地であり、高級マンションや一戸建てが立ち並ぶ。そして最も外側には「通勤者地帯」が広がる。中心業務地区から 30～60 分の範囲内にあり田園風景が広がる。バンガローが建ち並ぶ。

バージェスはこうした拡大・分化の過程を、与えられた環境に適応しようとする個人・集団間で生じる競争と

淘汰の結果として捉えた。また、こうした都市の人間生態学的構造は不変ではなく、解体と再編を通じて新陳代謝を繰り返すと主張した。

それに対してH. ホイトは、シカゴ以外の都市の住宅地区の分布も検討して、都市を構成する地域は同心円というよりも主要な交通路に沿って扇形に分布するという「扇形モデル」を提唱した。また、C. ハリスとE. ウルマンは、都市の核心は中心業務地区の1つだけではなく複数発達し、それぞれの核心の周りに特有の機能を担う地域が形成されるという「多核心モデル」を提唱した。もっとも、現実の都市の発展は、こうしたモデルのうちどれか1つだけでは説明できない。それぞれの枠組みの有効性は、現象の中のどのような側面を重視するかに依存する。

(803 字)

TAC 生はココで解けた！

東京都 I 類B 対策セミナーの予想問題が的中したので、復習していれば解けたはずである。また、専門記述対策（政治系）テキストレジュメ P. 114 に掲載している特別区 I 類の過去問ともほぼ同一の問題であるため、こちらをしっかりと学習していれば解けたはずである。